

春夏秋冬

台湾徒然



第50回

猛艸

今春、台湾での正月興行のヒット作

といえはやはり『アバター』なのだが、一時それを上回る勢いを見せたのが、『猛艸』という台湾映画だ。猛艸は現在の台北市萬華の旧称である。名利・龍山寺のあるところといえは、お分かります。『バンカ』という地名は、当地原住民ケタガランの言葉で小舟という意味だったらしいが、その音に漢人が「猛艸」という漢字を当てていたものを、日本人が「萬華」に改めて今日に至っている。

ここに小さな波止場があつて、水辺に生きる彼らの交易場所になつてきた。やがて淡水河を遡行してきた漢人の船が荷をおろすようになり、一本の道がのびた。これが現在の貴陽街で、この道から260万都市台北は勃興した。

だからこそ「猛艸」というタイトルには、台北人にとって特別な意味がある。ただ映画はそうした歴史を追つたものではなく、猛艸を舞台に暴力団の

抗争に巻き込まれていく若者たちの苦い青春を描いたものである。が、時代は1987年とはつきり特定されてい。この年、38年続いた戒厳令が解除され、翌年1月には蔣経国総統が病死し、国民党独裁時代に終止符が打たれる。こうした台湾史の節目に時間を設定したところにも、制作者の意図は汲み取れよう。

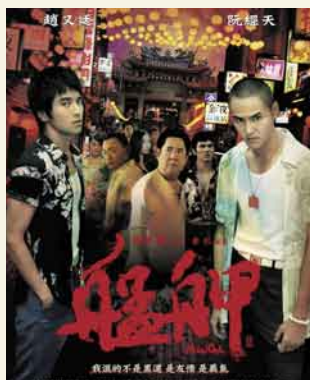
制作・監督の鈕承澤は王童監督の名作『バナナパラダイス』で主役を演じた、満州族の血を引くという外省人。祖父は將軍、父は早くに病死し、母は教師をして鈕承澤を育てた。そうした素性も興味深い、実はその昔、私は彼の母に中国語を習つたことがある。

が、そのどら息子は役者として大成した。あたりのおかみさんに似てなくもない。授業の合間に家庭の愚痴をよくこぼし、長子の将来もきにかけていたが、そのどら息子は役者として大成し

たばかりか、いまや台湾を代表するプロデューサー、映画監督になった。

そして最新作『猛艸』は台湾映画の興行成績(週間)の記録を塗り替える大ヒットである。140分という長丁場、緊迫した画面が続く。これだけ密度のある娯楽大作に台湾で初めて出会つたような気がする。

主人公は外省人のある少年。父親は死んだときかされている。母は小さな散髪屋を営み、一人で子を育ててきた。母子はなぜか萬華へ越してくる。少年は転校先の高校で4人の仲間と知り合い、義兄弟の契りを交わす。その



古い街並みに躍動する青春群像

兄貴分の父親がやくざの親分だったことから、少年たちは退学と同時に抗争に巻き込まれ、ついには悲劇的な結末を迎えるのである。

福建系台湾人のシマである猛艸に殴り込みをかけてきたのは、外省人一家だった。しかも、そのボスは死んだときかされていた少年の父の父親だったことがやがてわかる。

仲間の裏切りに激昂した少年はただ独り復讐を決意するのだが、その相手は実の父親である。萬華という町の風土や人情を背景に、台湾の二つの勢力の対立、そして大人の世界に戸惑う若者たちの個性がよく描かれている。台湾ファンにはたまらない世界が展開するのだが、子弟の教育によくないと上映に反対をしている人たちもいる。そういえば、猛艸は萬華には行くなと行つたことがないという台北つ子が少なくない。

柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮質」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たち」の聖戦(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)